

## 名詞一語発話は文発話か

定延利之

## 謝辞

この発表は、日本学術振興会の科学研究費補助金による基盤研究 (S)20H05630, 研究代表者: 定延利之), 国立国語研究所共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」の成果を含んでいます。

1

2

## 「唯文主義」の3つのヴァージョン

強い唯文主義: 「談話に現れる発話はすべて文」

(1)理想主義によるもの: 「理想的な話し手は文単位で話す」  
文以外の発話はパフォーマンスの乱れとして排除する。

(2)文の広い定義によるもの: 「文とは発話(言語活動)の単位」

弱い唯文主義: 「談話には文でない発話もある」が「不完全部分は文脈や会話相手によって文に修復される」。

**主張: 談話には文でない発話もある。それは文に修復されない。**

## 名詞一語発話と弱い唯文主義

語発話は会話参加者たちの心内で文発話に「復元」?

- ・語発話しかできない幼児の会話
  - ・語発話しかできなかったであろう原始人の会話
- 個体発生的にも系統発生的にも無理がある。

学校教育を受けた「大人」の問題としては成り立ち得るか?

3

4

## 強い唯文主義の例 1

ジョン・リースによれば、文の定義にずいぶんいろいろ(くの字点)あるようであるが、要するに、古くは、主語と述語とのあるもの、ファイナリティ・パーブをもっているもの、それを文と稱していた。ところが、そうすると、そのような述語や副詞のないもの、**感動や呼びかけのことばなどは、文と呼ばなければならぬと雖でも厳し**ながら、文と稱することができなくなる。そこで、たとえばヘルマン・パウルのような定義づけがあらわれてきた。

文は、いくつかの概念または概念群が話し手の心で結びついたこととしるしであるところの、そしてそれと同じ概念のそれと同じ結びつきを聞き手の心で起させる手段であるところの、ことばによる表現である。(言語学原理一二一頁)

そして、言語活動(言語行動)は実際にはみな文としておこなわれるものであるとされているが、この傾向から、**あらゆることばは実際につかわれる場合はすべて文であるといわれるようになり**、近年、それがパロールの立場から責められるようになってきた。

「語」はランゲージの単位であるが、「文」はスピーチの単位である。(ガーディーナー・言および言語の理論八八頁)

これが西洋における文の定義の進展してきた傾向であるが、わが国文法界においても、もと々(くの字点)西洋の学説の影響によって「文」を云々するようになったことでもあるから、同じような傾向にすすんでいくのはむしろ当然であるといえよう。(pp. 309-310)

【本誌正位 1249 「文の定義」『国語学』第3巻, pp. 310-332.】

## 強い唯文主義の例 2

ここでは、文を次のように捉えている。私たちは、現実との関わりの中で、言語を利用することによって、考えや感じを明確にしたり、また、考えたことや感じたことや意志や要求を相手に伝えたりしている。このような活動を(言語活動)と呼んでおく。私たちが見聞きする文章や談話は、言語活動の所産である。文章・談話は、文一つで出来ている場合がないわけではないが、**通常、いくつかの文の連なりによって出来上がっている。**(文)は、このような文章や談話の中に具体的に観察される基本的単位であり、したがって、**文によって、言語活動が行われている、**と言えよう。**文は言語活動の基本的単位である、**というのが、筆者の文に対する基本的で根底にある捉え方である。(p. 15)

【仁田義雄 2016 『文と事態類型を中心に』東京: くろしお出版】

5

6

## 強い唯文主義に基づく文判断の例

最初に、一般的に文として位置づけられる表現が見せる多様な現れの一部を例示しておく。

- (1) 男がうつぶせに倒れていた。
- (2) 彼女はとてもやさしい。
- (3) 大阪市の主な外郭団体の見直しを進めてきた市管理団体評価委員会は27日、07年度までに7団体を解散、13団体を6団体に統合・再編するなどして、現在66ある団体数を22に減らすよう求める提言をまとめた。
- (4) お巡りさんだけ、俺は。
- (5) 「おふくろさんも、そうだったのか？」案が言った。「らしいですね。」  
(鎌田敏夫「金曜日の妻たちへ」)
- (6) 清水寺—聖武天皇の延暦24年(805)の創建。西園三十三カ所観音霊場の十六番札所。
- (7) あら！ 電話。
- (8) うわ！ 川に！

上の例は、いずれも一般的に文として把握されている表現である。

【仁田義雄 2016 『文と事態類型を中心に』 pp.13-14, 東京: くろしお出版】

7

## 「名詞一語文」「感動詞一語文」への反対説

つまるところ、「ねずみ！」は、発話場面の中で話し手によって発話された上述の意味における談話であり、発話時の言語文脈と発話場面情報によって、上記の意味が表現され解釈されているという事実を注目すれば、これを一語からなる談話、すなわち「一語談話」と記述することが妥当であろう。「ねずみ！」は、「一語文」ではなく、「一語談話」である、と考える。

以上、「ねずみ！」のほかにも「わあ！」などは、一語談話ではあるが一語文ではないことになる。文とは抽象的に取り出すことができるレベルにおける単位であって、単語言語である現代日本共通語においては、**述語を有した記号的まわりを指して「文」と定義する**考えにくみする。この定義にしたがえば、「痛い！」は、一語談話であり、かつ、「痛い！」という発話から「文」を抽象できることになる。この場合は述語のみの文であって、格は省略された一文である。ちなみに、先の「ねずみ！」「わあ！」という一語談話から抽象的に抽出されるのは、「ねずみ」「わあ」という「語」である。  
(pp. 74-75) 【沖裕子 2006 『日本語談話論』大阪: 和泉書院】

8

## 文定義の優劣は…現象記述力を基準とすべき

このような立場を筆者が取るのは、突き詰めれば筆者の好みの問題なのかもしれない。ただ、要はこの種の立場で文に関わる現象をいかほど包括的に十全にそして一貫した説明・捉え方で分析・記述できるか、ということであろう。(p. 15)

【仁田義雄 2016 『文と事態類型を中心に』 東京: くろしお出版】

**では具体的現象を通して検討してみよう**

9

## 検討1：語用論的な検討

10

## 語用論的な検討：概要

[1] 名詞一語発話には権力・会話・きもちのいずれかのサポートが必要。

[2] それらは、広く文発話と認められているものには本来的に必要なし。

一名詞一語発話は文発話としない方が「文」の定義として便利。

11

## [1] 名詞一語発話にはサポートが必要

・権力のサポート：権力があれば自然

(1) メシ。風呂。

・会話のサポート：「受け」の発話なら自然

(2) [「沖繩に行ってきたよ」と言われてなぞる] 沖繩。

・きもちのサポート：きもちが現れていれば自然

(3) [ネズミに驚いて叫ぶ] ネズミ！

(4) [ホテルマンが客に] お泊まり？ お一人様？ ←失礼  
例外的なサポート不要発話：焦点化されていない、不特定多数への業務発話  
「焼き芋」「さおだけー」「[車内アナウンスで] 松本ー」

12

**[2] 文発話と認められているものはサポート不要**

- 権力のサポートなし：下位者から上位者へ
- 会話のサポートなし：隣接対の第1発話
- きもちのサポートなし：きもちが現れていない

- (5) a. 今日はよろしくお願ひします。  
 b. お先に失礼します。  
 c. [注意を喚起] そこ、段差あります。

13

**同じように行かない文は内容に原因あり**

- 権力のサポート（権力があれば自然）  
 (1) 食事を出せい。風呂の支度をせい。 ←命令
- 会話のサポート（「受け」の発話なら自然）  
 (2) いいえ違います。 ←応答
- きもちのサポート（きもちが現れていれば自然）  
 (3) [火事に気づいて家族にささやく] 火事です。 ←大事

14

**検討2：韻律面の検討**

15

**韻律面の検討（前半）：概要**

- [1] 名詞一語発話は、焦点化された呼びかけを除けば、どのような発話態度でも末尾の音調が（自然下降declinationを別として一以下略）下降しない。
- [2] 広く文発話と認められているものは、発話態度によっては末尾の音調が下降する。
- 焦点化された呼びかけ以外の名詞一語発話は、文発話としない方が「文」の定義として便利。文に

16

**アンケート調査の刺激音声と状況 1/2**

[状況 1: 列車が松本駅に到着。車内アナウンスで駅名を言う]



[状況 2: 地図を広げて松本駅を探しながらひとりごとをつぶやく]



[状況 3: 海難事故で亡くなった友人の松本氏を悼み、海に向かい叫ぶ]



[状況 4: 森ではぐれた友人の松本氏を探しながら名を呼ぶ]



17

**アンケート調査の刺激音声と状況 2/2**

[状況 5: 向こうを向いている友人の松本氏に呼びかける]



[状況 6: 友人である松本氏の献身に感動し、目を見ながら呼びかける]



[状況 7: 友人である松本氏の部屋のドアをノックしながら呼びかける]



18

## 調査の結果 1/2

- [状況 1: 列車が松本駅に到着。車内アナウンスで]  
 [状況 2: 地図を広げて松本駅を探しながらひとりごと]  
 [状況 3: 海難事故で亡くなった松本氏を悼み、海に向かって]  
 [状況 4: 森ではぐれた松本氏を探しながら]

平均 / 中央値

	状況 1	状況 2	状況 3	状況 4
音声 1 (平坦調)	4.24 / 5	4.06 / 4	3.97 / 4	3.87 / 4
音声 2 (下降調)	** 1.72 / 1	** 2.32 / 2	** 2.11 / 2	** 2.05 / 2

19

## 調査の結果 2/2

- [状況 5: 向こうを向いている友人の松本氏に呼びかける]  
 [状況 6: 友人である松本氏の献身に感動し、目を見ながら呼びかける]  
 [状況 7: 友人である松本氏の部屋のドアをノックしながら呼びかける]

平均 / 中央値

	状況 5	状況 6	状況 7
音声 1 (level)	3.10 / 3	1.69 / 1	2.92 / 3
音声 2 (falling)	** 3.66 / 4	** 3.92 / 4	** 4.03 / 4

20

## 文と呼ばねばならないのか？

ジョン・リースによれば、文の定義に「いふんいふ」(くの字点)があるようであるが、要するに、古くは、主語と述語とのあるもの、ファイナリティ・パーブをもっているもの、それを文と称していた。ところが、そうすると、そのような述語や動詞のないもの、感動や呼びかけのことはなどは、文と呼ばねばならないと雖でも感じながら、文と称することができなくなる。そこで、たとえばヘルマン・パウルのような定義づけがあらわれてきた。

文は、いくつかの概念または概念群が話し手の心中で結びついたことのあるところの、そしてそれと同じ概念のそれと同じ結びつきを聞き手の心中に起させる手段であるところの、ことばによる表現である。(言語学原理一二一頁)

そして、言語活動(言語機能)は実際にはみな文としておこなわれるものであるといっているが、この傾向から、あらゆることばは実際につかわれる場合はすべて文であるといわれるようになり、近年、それがパロールの立場から言いあらわされるようになってきた。

「語」はランゲージの単位であるが、「文」はスピーチの単位である。(ガーディナー・言および言語の理論八八頁)

これが西洋における文の定義の進展してきた傾向であるが、わが国言語界においても、もと「くの字点」西洋の学説の影響によって「文」を云々するようになったことでもあるから、同じような傾向にすすんでいくのはむしろ当然であるといえよう。(pp. 309-310.)

【大岩正伸 1949 「文の定義」『国語学』第3輯, pp. 310-332 再掲】

21

## 韻律面の検討(後半) : 概要

- 「強いきもちで発話末尾を伸ばすとイントネーションは下降しがち」という、名詞一語発話に限らない一般的な規則性が認められる。
  - 語用論的な検討から、焦点化された呼びかけ発話はきもちが強いと考えられる。
- 焦点化された呼びかけ発話の末尾が下降するからといって、これを文発話と考える必要はない。

22

## [1] 強いきもちで発話を伸ばすと下降

広く文と認められている発話

- 行けえ！ ↓
- イヤだよお！ ↓
- 腹が立つう！ ↓

そうでない発話

- あんたったらあ！ ↓
- いつもそうなんだからあ！ ↓



23

## [1] 同じことを別の方法で表したもの

- だからあ あたしはあ ??いやなのお。  
 「文末では跳躍的上昇の後には下降しない。」[郡 1996]  
 「但し一般に、強いきもちでは発話末で下降可。」  
 (20) a. 行けえ！ 働けえ！ 行くう！ [定延 2016]  
       b. イヤだよお！  
       c. 腹が立つう！  
       d. あんたったらあ！  
       e. いつもそうなんだからあ！

24

## [2] 焦点化された呼びかけ発話が自然な理由は きもちのサポートと考えられる

- 権力のサポート（権力があれば自然）  
(1) メシ。風呂。（寝る。）
- 会話のサポート（「受け」の発話なら自然）  
(2) [「沖縄に行ってきたよ」と言われてなぞる] 沖縄。
- きもちのサポート（きもちが現れていれば自然）  
(3) [ネズミに驚いて叫ぶ] ネズミ！

例外的なサポート不要発話：焦点化されていない、不特定多数への業務発話  
「焼き芋」「さおだけー」「[車内アナウンスで] 松本ー」

25

## 結論

- 言語活動の単位として文を定義し、名詞一語発話を文とすることは、有用性に欠ける。そのような広い文の見方では、以下の諸点をとらえられない。
- 名詞一語発話は（統語論のレベルだけでなく）語用論や韻律のレベルにおいても、広く「文」と認められている発話とは異なる。
- 語用論的には、広く「文」と認められている発話と異なり、名詞一語発話は（焦点化されていない業務発話を除けば）権力・会話・きもちのいずれかのサポートを要する。
- 韻律の面では、広く「文」と認められている発話と異なり、名詞一語発話は一般には下降調イントネーションを担わない。焦点化された呼びかけはその例外となるが、文と認める必要はない。焦点化された呼びかけがきもちのサポートを要すると考えられるからである。

26

## 言及文献

- 仁田義雄 2016 『文と事態類型を中心に』東京：くろしお出版。
- 沖 裕子 2006 『日本語談話論』大阪：和泉書院。
- 大岩正仲 1949 「文の定義」『国語学』第3輯, pp. 309-332.
- 定延利之 2019 『文節の文法』東京：大修館書店。

27